
東方屋『奇』楼

ままま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方屋『奇』楼

【コード】

N5639M

【作者名】

ままま

【あらすじ】

それはあとある可能性の一つ。目覚めた処は紅葉、しかしその姿は…

最初に（飛ばしてもおk）

この小説は同作者の黒歴史『東方屋気楼』をベースに色々足したり削ったりして再構成された小説です。

東方屋気楼の現状態が

誤字脱字が多い（言ってはダメだが修正する気が起きないほど）

意味のわからない葛藤（笑）

妖怪様（笑）

などとぶっ飛んでいるので、そんな部分をカット、変更しようと思
います。

似たような表現があったりするでしょうが……

で、色々手直ししていて大きく変わった部分が

『存在して存在しない程度の能力』のベクトルを大きく転換して、
むしろ強化されてしまいました。だって主人公がアレ
ですから。

東方屋気楼における平行世界の一つ、と考えてくれれば幸いです。

存在と非存在

複数ある可能性、可能性とは無限に存在するというが実際はどうなのだろうか。人間の子どもに可能性云々説きふせては将来立派になることを目指せるようにし、人間の子どももまた成長すればするほど可能性の枝がバツサリバツサリ切り落とされて行くの实感していくのだろう。しかし實際は”存在”する。ただ見えなくなるだけなのだ。例えば齡が100になろうとも、目指す限り途絶えることは無い。ただの可能性が消えていくのはただの先入観であるのだ。

なぜならば？

可能性が消えて行けば行くほど、それを埋める『負』の可能性が”存在”するからだ。しかもプラスマイナスゼロというわけではない。むしろ負の可能性がより大きくより太ましく、何よりも頑強でそれはもう…

いやらしく……

±東方屋『奇』楼±

とある『可能性』によって隔離された”存在”と言うのは難しいだろう。簡単に言うならばただの平行世界である。とある分岐点によってその可能性を持った以後の世界が無限に連なるといふ話の平行

世界である。さて、そんな現実における可能性……平行世界の一つの世界にそれは”存在”した。

「いい加減に我を離したらどうだ、酒呑」

「や」

そこには二つの命が存在する。片方は不思議なことに頭の左右に角をつけた幼女。腰にヒモで括り付けた瓢箪、両手首に鎖が連なっている手錠のようなアクセサリ、足の付け根辺りまで伸びている明るい栗色の髪の毛を腰辺りで結んでいる髪留めもまた、鎖が繋がっている。しかも三つの鎖の先には球体、正方形、三角錐の飾り。これもまた重量的にもビジュアル的にも幼女がつけるべきでは無さそうなものである。

「酒を近づけるな、ド阿呆」

「おー、よしよし」

しかし幼女はそれらの”存在”について何も言わず、どこるか普段からそうであるかのように振る舞う。実際はそうであるのだが……。ある意味彼女の手錠のような腕輪は彼女の”種族”として殆ど当たり前であるのだ。彼女の正体は『鬼』、古今東西あらゆる人間が忌み嫌う恐怖の体現、それが彼女『イフキ・スイカ伊吹萃香』であるのだから。

「や、やめ……に、にゃん」

「おお…これはいい」

そんな彼女に膝枕をされあまつさえ撫でられているという”存在”

がいた。神々しいとも言えるほど純白の小さな体に、黄色と淡銀灰色の月目。金目銀目に白という幸運まつただ中（女性に膝枕に撫でられているというのも足して）にいるその『猫』は彼女にいいように扱われていた。ふさふさと”野良”と思えないほどふかふかな毛が榮えている喉元を幼女の柔らかい手で撫でられ、ゴロゴロと鳴らすのはしょうがないだろう。

「ゴロゴロ……ハッ!？」

「むふふ〜」

目がうつとりしているころにようやく猫は自身を取り戻す。しかし、なで続けられているわけで……次第に”彼”を眠気が襲う。一応由緒正しい『化け猫』である彼が彼という単一な存在から見れば鬼の彼女は格下（もう一度書くが彼女は酒呑童子である）であるのだが、たまにはこういうのも悪くない、とそれに身をまかせることにした。

「あれ？幻想丸、寝ちゃったか。まあ、いいか」

その化け猫の名前は『タイザンホウゲン・ダイケンソウマル泰山法眼大幻想丸』という。とある帝から直接その格好いい名を貰った”存在”である。すやすやと無防備にも腹を彼女に向けご機嫌なまま眠っている彼と、彼女が大好きでいつも飲んでる酒を珍しく飲まずに、ただゆっくりと猫を撫で回している彼女。その光景を見るだけではその『猫』と幼女がどれほど恐ろしい存在かは想像出来やしないだろう。

「おーい萃香〜つていたいた。おお！幻想丸もいるじゃないか！」

ちょっと場所代われ、と姉貴肌の胸から女性の塊をぶら下げたやはり手首には手錠のような腕輪、そして額から天にむけ真っ直ぐ

と伸びる朱紅の角　鬼が半ば強制的に詰め寄るが、伊吹萃香はその『猫』が起きてしまうという理由を盾に拒否、さすがにそれでは彼女『ホシクマ・ユウキ星熊勇儀』も手を出せなかった。

「むにゃ…ゴロゴロ」

「おおー！」

しかし彼女もまた、眠っている猫を撫で回し、猫がゴロゴロ言っているとこのようにはしゃぐのだった。彼女たちの光景は一見、それはもうほのぼのとした空間であるが……、三匹の内二匹は鬼族の中でも高位の四天王の二柱、最後の化け猫とさえいば”幻想郷で最も強い妖”であるのだから相当な異常を孕んだ景色である。

幻想郷

妖怪の賢者が創りし理想郷とも墓場とも言える場所である。この可能性の一つとして存在している世界には化け物が存在したのだ。人はそれを”悪魔、妖怪、神”等と呼んでいる。そう、そこには彼ら負の眷属達が住んでいたのだ。

「いいねえ〜こついのも」

「ああ、そうだね〜」

猫のヒゲがひくひくと動く。彼らはそれはもう強力な力を保有している。人間達が束になっても敵わず、怖れ恐れられ畏れられる存在だからこそ彼らは人間に敗北したのかもしれない。進化と排他の現実”人間”達に。だからこそ彼らは今幻想郷に住んでいた。そこは幻想の街、幻想の故郷、全ての幻想を受けれる墓場。残忍で残酷で

残念な理想郷。

そう、彼らは幻想と成り果ててしまったのだ。

冷房の聞いた部屋でカタカタとキーボードの音を鳴らす人間が、どうして信じようか。角の生えた存在を、しゃべる猫を。例え彼らは異常な能力を保有していたとしても、人間達は忘れてしまったのだ。それは帝から名を貰った”幻想”の名を保有する幻想丸も例外では無かった。もつとも彼そのものは妖怪の中でも例外中の例外であるのだが……。例外、というのも彼の保有する”能力”のことでもあるし出生のことでもある。

「もふもふ」

妖怪達には変わり種と言うべき存在が多数存在する。妖怪と云えば何を想像するか？鬼だとか天狗だとか、その辺りだろう。こういった種族として確立している存在もいれば妖怪の賢者のように一人一種という極めて珍しい存在もいる。また一人一種の妖怪に関してはその”能力”の特異性や妖怪達が持つ力”妖力”の高さなどが上げられ、簡単に言うと滅法強い。まあ、妖怪達の間でも他種族の排他というのも存在し、一人一種では護ってくれる存在がいなかったため自然と強い存在が生き残った、という見方も出来るのだが。

「にゃ、にゃふん！」

彼ら妖怪の間では希に”能力”を保有する存在がいる。能力の具現条件は未だにわかっていないが、能力保持者の大抵が一人一種の妖怪は言うまでもなく同種族の妖怪よりも遙かに強いということを述べる事が出来る。能力の発動には”常時発動型””意識発動型””条件発動型”などと分類され、特に意識発動型が多くこれには妖

怪が持つ妖力、あるいは魔に精通した者の魔力、はたまた人間の根源たる力の霊力を消費して発動するのだ。常時発動型は、例えば星熊勇儀の『怪力乱神を持つ程度の能力』のように自身そのものを表すこともある。条件発動型はさらに特に珍しいので語るのは後になるだろう。

「ぷにぷに〜」

幻想丸が保有する能力は、“常時発動型”“意識発動型”“条件発動型”の三つ全ての側面を持つという歪な能力でもある。いつから確立した妖怪かは本人しか語ることは出来ないが、彼が持つ妖力の高さは幻想郷でも随一（というか比べることすら愚かなレベル）であり、能力の 簡単に言うと強さなのだが 曖昧さも半端無い。

「ほんつと、コイツが幻想郷で最も強い妖怪とはねえ、こんなにかわいいのに」

「紫が昔式神にしようしたらしいけど……」

彼が保持する能力は『存在して存在しない程度の能力』である。かの妖怪はどこにも存在し、どこにも存在していない。だからこそどこにも存在することが出来るし存在しない故干渉することも出来ず、全ての存在を内包した大幻想、泰山法眼大幻想丸であるのだ。妖怪に精通した存在ならば、彼のようなもはや神のレベルに存在する存在が「何故妖怪という枠組みに収まっているのか」という疑問を持つが、実際に存在しているのでしょうか。そして存在という言葉は何回使っただろうか。

「我を求めるのも無理は無いがな」

目を覚ました幻想丸が眠たそうな目をプニプニしている肉球で里の子供に愛されてしょうがない手でこする。威厳たっぷりの言葉であるが、愛らしい姿では台無し、むしろ愛らしさが増加するという状態。幻想郷で最も強いと言われている彼でも、さすがに真正面からの鬼の力からは逃げられず、文字通り揉みくちやにされている。

「まあ、紫も異常だけど幻想丸はそれを越える異常だからねえ」

星熊が手をやれやれ、と手を振りながら言う。だが結局その手を猫の白い体躯へと伸びて撫で回される。止めて欲しいとは思っている幻想丸だったが、結婚して三秒後の新婚夫婦の如く幸せな表情をしている鬼共の顔を見ると、やはり彼にとっても大切な存在であるため戸惑ってしまう。彼からすれば自身の半分も生きてない小さな妖怪（幻想郷ではトップクラス）だが、そこにあるのは父親的な何かだったかもしれない。そしてもちろん

「なんで抓る？」

「「なんとなく」」

こういうことになってしまふのであった。幻想郷では”とある事”のせいで強力な男妖怪共がほとんど死に絶え、必然的に幻想郷の妖怪達、特に上位者として名を聞かせる者はみんな女性（幼女、少女、ババアばかり）であるのだった。なんとというか、ある意味必然的な感情でもあるのだが……、しかしどこぞの吹く風よ？と言わんばかりの幻想丸、そして彼の背中側の首の付け根をつねる鬼娘二人。抓る場所的には彼女たちも彼のことを考えている証拠なのだが、なにしろ鬼。特に片方は力の四天王と呼ばれる星熊勇儀であるというこ
とで……

「痛い痛い痛い、老いぼれ猫には痛すぎてポツクリだにゃー」
ふざけた語尾でおちよくる。実際猛烈に痛かったのだが彼にも威嚇がある。小娘二人の力で悲鳴を上げるといふ、どうでもいい男の見栄っ張りでもある。しかしあんまり痛くなると心臓が止まりそうなので己の存在の中から痛覚の存在を消し去る。しかし痛くなくなるだけだ。実際は皮ごと引きちぎられそうな感じである。怖い怖い

「いいもーん、幻想丸なんて三味線にでもなつてればいいんだ」

いじけた様子、プイッと顔を背ける伊吹萃香。猫の彼にはどうしようも無く、なんのこともわからない次第、とりあえず彼の思考の中には自身が三味線となつてしまった後のことであつた。幻想を内包しているという特異な存在の皮と毛を用いた三味線、それはもうアーサー王が担つた聖剣を越える宝具になるのではないだろうか……、自身が殺されるといふ映像をハッキリと思ひ浮かべることの出来ない彼は、特に恐怖することもなく「まあ、そういうこともあるんじゃないか？」程度にしか考えて無かつた。

「そういえば、昔我の毛を溶かし込んだ槍が合ったが……どこにいったかな」

「鍛冶屋は何を殺すつもりで造つたんだよ……」

彼の毛を溶かした槍を想像する星熊、大妖怪と呼ばれる存在からすら畏れられている（愛せられている）彼の毛を抜くという行為もアレだが……

「なんでも白面金毛九尾の狐を殺すためだとき。憎しみに憎しみを込めてたから倒せたかどうかは知らん」

憎しみや恐れといった感情は彼ら妖怪の栄養でもある。もともと原初としての生まれた理由が「人々が恐れたから」であるため妖怪は人を襲う。何より妖怪にとってそれが一番人間に恐れられるからであり、襲うという行為は人間が食う寝る出すの三拍子と同じレベルである。

「白面金毛ねえ、紫の式とは違う九尾か」

先程から出てくる『紫』なる人物がこの幻想郷の管理人であり妖怪の賢者『八雲紫』ヤクモ・ユカリである。彼女は妖怪の中でも特に最高位であり、妖怪、人間問わずあまり関わりたくない人物第二位である。一位は閻魔様だ。一応言っておくが最高位というのは幻想郷の一般人からの視点であり、妖怪勢から見れば目の前の白猫に比べたら……という感じである。猫から見れば賢者もまだまだ、とのこと。

「藍か、あいつはまだまだ未熟さね」

「（お前が言うな）」

心でツツコミを入れる。その猫から見れば全員未熟な存在であるからである。例外として彼よりも長く生きているという存在が博麗の祭神（現在行方不明）らしい。彼が言うには負けることは無いが勝つことも出来ない、能力の相性の関係もあるとのこと。そんな大和神や土着神よりも古い神だという、怖すぎる。下手をすればギリシヤ神話や北欧神話の最高神と肩を並べる存在なのだから。

「そっいえば幻想丸って尻尾増えないの？」

伊吹が疑問を口にする。妖獣における尻尾の数は強さや格の高さを

表すとも言われる。その最高峰が九尾狐であるのだ。化け猫の基
本は二本、また彼の知り合いの鼬が八本持っているというのが本当か
どうかは定かではない。

「解放すると増えるぞ、全部で三六本辺りだったか……」

「なにそれこわい」

続く

存在と非存在（後書き）

こっちのほうの更新は、ネギま二次作の間にする予定なので超不安定かと思えます。

確定と不定

†泰山法眼大幻想丸†

その妖怪は人間達からはあまり知名度は高くない、ここに知名度というのは人間からどれほど恐れられているかということだ。というのも誰も彼が畏まるような相手じゃないと思っっているのもある。その上見た目はまんまネコ、しかも幸運の象徴でもあるような姿なのだ。そこら辺の妖怪のように、ある程度力を持つ妖怪が行う”人化”の術もまったくと言っていいほど使わないので、里の人間達と彼の間にある関係は……

わーわーきゃーきゃー！！

「引つ張るな餓鬼共、痛い痛い」

団子屋のイスにお眠むの体勢をとっている白猫、幻想丸に群がっている里の子供達。撫でられ引つ張られ団子を押しつけられ。さて、誰が疑問に思うだろうか？目の前の化け猫が妖怪の賢者や、死を操る亡霊、運命の吸血鬼、永遠の月の姫、酒を愛する鬼、山々に降臨した神、地獄の裁判官である閻魔、向日葵に住む花妖怪、それらの妖怪よりも遙かに恐ろしい存在だということ。

「幻想丸あれしてー！」

あれー！と騒がしい子供達を片方の目だけ開けながら、やれやれ、と言った感じで聞き流す。その気になれば声も、毛を引つ張る痛みも消すことが出来るのだがあまり能力を使いたくないため彼はそんなことをしない。しかし次第に鬱陶しく感じてきた幻想丸は”あれ

”をするためにようやく起きあがった。内心、親に猫に対する扱
方を再教育して欲しいものだと思痴をこぼしながら。

「フー」

「おおおー!!」

幻想丸が息を吐くとあら不思議。その白い息は世界の様々な光景を
映し出している。その世界の幻想郷でも見れないような秘境の数
々が流れるように映り変わっていく。巨大な一枚岩、空高くから落
ちる天使の滝、流れる大氷河、見れば見るほど人を引きつける不思
議な”屋気楼”であった。そして次々とリクエストする子供達に答
える猫はやはり、最強種とはとても思えなかつただろう。

「何をやっ……！泰山様！？おまえ達何をしている！」

「うわー！！けーね先生が怒つたぞー！」

蟻の巣に来襲したアリクイのごとく彼女は現れた。子供達の天敵で
ある彼女、真っ直ぐな銀髪に不思議な四角い帽子、青を中心とした
その服、ついでにおっぱい。そんな彼女の名前は『カミシラサウ、ケイネ上白沢慧音』里
で唯一の寺子屋を営む唯一の教師だ。もともと教師というのは生徒
に恨まれやすい職業である（もちろん教師はだいたい生徒のことを
想ってる）が、彼女が天敵たる理由はそれだけじゃない。

「おっふー!!」

ゴチン!!と彼女の頭突きが一人の少年を襲う。これだ、この頭突
きが彼女の武装で最強の概念を誇る業である。込められし概念は恐
ろしくて言えない。しかし彼女の頭突きはどんな糞餓鬼でも大人し

くなる（痛みで）という。まあそんな彼女も普通はやさしい教師（美人だし）であり、その頭突きも宿題を忘れたりしたような子供にしかない。

「ワーハクタク、相変わらずの頭突きだな。思わず毛がたつたぞ」

「泰山様もビシッおっしやっってくださいよ」

彼女はワーハクタクという存在なのだ。つまるところ妖怪、正確には彼女はハクタクの血を引く半獣という立場なのだが。ハクタク、白澤は幻想郷において歴史を司る妖怪であり、起源は中国にある。顔が人であり後ろが牛、という姿をしていて正直怖い。そんな姿とは裏腹に中国では聖獣の一角（角なだけに）である。

「なあに、大きくなったら喰ってしま……冗談だ」

人語を解し万物に精通するとされる聖獣とも言われ、徳の高い為政者の治世に姿を現すとか、病魔よけになるとかと言われている。麒麟や鳳凰と並ぶ存在なのだが、いかせん日本では少しマイナーだろう。もつともそれを彼女の正面で言うとは間違いなく頭突きが襲ってくる。みんなも気をつけよう。

「鳳凰の子はどうした？また竹林で仲良く殺し合いか？」

「仲良くって……彼女は畑仕事を手伝ってますよ」

鳳凰の子、彼女もまたいずれの機会の語ることになるだろう。さて、彼女は半分と言えど妖獣のはしくれである。故に妖獣の頂点たる彼には敬意を表していた。幻想丸としては、敬意を払うのも百年来の友人かのように振る舞われてもどうもいいが、里のほとんどの人間

と関係者たる彼女だとさすがにむず痒そうだ。それでも、特に変えるように言う幻想丸ではない。もう一度書くが彼女は妖怪だ、何が言いたいかというと見た目20代の美人教師なのだが……、そんな年齢ではない。この幻想郷が隔離される前から教師の役目をはり、ずっと教え続けてきた。能力のこともあり天職とも言えるだろう。

「そうかそうか、それは重置重置」

満足そうにニヤーニヤー鳴く白猫。丸まっているモコモコの彼を見てつい手を伸ばしてしまう彼女だったが……、理性がどうやら勝ってしまったようだった。少しずつ伸びる右手を左手で押さえ込むという。傍らから見れば変な所動であるのだが、幻想丸は気にしないことにした。

「そういえば、妹紅と泰山様はいつからの知り合いで？」

「そうだな、彼女がまだ人間だったころからだ」

幻想丸に鳳凰の子と呼ばれた人、彼女の名前は『フジワラノ・モコウ藤原妹紅』という。そう、彼女は人間だった。俗に言う妖怪化とも言えるかもしれない。しかし彼女は妖怪では無く『蓬莱人』という不老不死の存在であった。死ぬことも生きることもし叶わずにただ存在するただの抜け殻のようで、それは儚い存在である。かつての中国の王も不老不死を望んだ、自身の栄光を失いたくないからだ。だが、たとえ死ぬような苦しみを味わおうが絶望しようが世界が滅びようとも、死ぬことは無い。それでもソレを望む人間とはなんと罪な存在か。

「そう、ですか……」

さて、皆は”竹取物語”を知っているだろうか。おそらく知らぬも

のはいないだろう。この竹取物語には五人の貴公子と月の姫、翁媪が登場する。そして最後には帝も現れる。思い出してみてもどうだろう、最後の最後に帝は何を手に入れたか？手紙と……？

「けーねー！何してんのー！おお！幻想丸！？」

噂をすればなんとやら、という感じで彼女は現れた。デジャヴウを感じながら幻想丸は尻尾を振る。色素が抜けきった長い白髪のに紅いモンペ。相変わらずこの幻想郷では人々（？）の格好は吹き飛んでいるが気にしないことにしよう。

「もふもふ！もふもふ！」

「も、妹紅！失礼だぞ！」

全身をわさわさしてくる少女に尻尾で答える幻想丸、だが彼女も千年ほど彼との付き合いがあるわけで。 ”心得”^{エロくない}をよく知っているものである。幻想丸が撫でられて気持ちいい部分を的確にもふもふしてくる彼女だった。藤原、彼女の名前は藤原妹紅。月の姫に挑んだ車持皇子も藤原であった。現実では血族には妹紅の名は無く、あるのは藤原不比等の名無しの五女伝説。さてさて、一体どういうことやら。

「幻想丸はフカフカだねえー」

むんず、と背中をつかみ自身の膝に置く。幻想丸は片方の耳だけを持ち上げねむねむしていた。尻尾がぶらりぶらりと彼女の膝を撫でる。それを羨ましそうに横目で見ながら団子を食べお茶を啜る半獣。団子屋の店主夫婦も、道を往く里の人間も妖怪も、その光景にはよくなれているようで、微笑ましい感じだった。

「ニヤァ」

欠伸とともに出す猫の鳴き声。ただの白猫にしか見えない彼だからこそ、逆に一部では恐れられ、大多数には愛されるのだろう。事実上では彼が牙を向いた事件はただ二つ、遙か昔、神代のころに行われた神と神の大戦争、そして妖と月の間で起こった、やはり戦争であった。ただ二つであるが、それでも彼の名は広く知れ渡っている（愛情的に）

ミンミンミンミン

季節は夏、蝉が所々鳴き染み渡る希望の季節。チリンチリンと風鈴の音を聞き、子供達のはしゃぎ回る音が響き、太陽の光が燦々と降り注ぐ。毎度毎度白猫は考える。これで何回目の夏が来たのか、そしてこの考えそのものの数もまた……。

今は昔、幻想丸といふものあり

「今季は、また暑くなりそうだ」

幻想丸の独り言に「そうですね」と上白沢が答えた。彼女達もまた、人とは比べるのが愚かになるぐらいの季節の変わり目を感じてきた。だからこそ、季節が変わるということが変わらないからこそ、何かを思ってしまうのかもしれない。

野山にまじりて歩き回り、よろづの幻想と成り果てる

泰山法眼大幻想丸、遙か遠き蜃気楼の大妖怪。全ての幻想を内包する全て遠き理想郷。彼の最初は紅葉の山から始まった。ありえない

光景でありながら、ありえない自身でありながら、それを当たり前かのように受容する我が身を見やる。猫だった。

「（我は猫である、名前はまだ”無”い）」

彼はしみじみと思う。あれからどれほどの年月が経ったのだろうか。月日は速く過ぎて行った。「人間だったころ」とは比べる必要すら無いほど速く。後ろ足で首の付け根をかく。抜け毛が無く、膝枕をしている少女を汚すことは無い。いつのまにか彼女は寝てしまったようだった。半獣と化け猫を顔を合わせお互い笑い合った。

「（ああ、本当に悪くない）」

悠久の風を受け止める。夏場に当たるその風はかつて無いほど心地よかったと幻想丸は思った。人々の活気が溢れる里を見渡すのは何度目か。これもまた悠久の中の一つになってしまったのだろう。しかし、そんな悠久を重ねようとも、この幻想郷は変わることが無く、同じ日々を紡いでいくのだろう。

「泰山様？」

「我はもうゆく、砂漠に帰る故」

では、と上白沢が膝枕の少女の頭をペチペチと叩く。ようやく起きた彼女はいろいろ焦っていたが、目に見えるほどわかるご機嫌ぶりだった。何かブツブツ呟いていたが気にすることなく幻想丸は、まるでそこにいなかったかのように消え去った。彼は屋気楼、どこにも存在しどこにも存在しない幻影。故にどこにも存在するし、”還る”場所など存在しない。

蜃気楼の砂漠

幻想郷においてこう言われる場所が存在する。幻想郷は総じて危険な場所だらけであるが……そこは群を抜いて『奇』険で奇抜で奇妙な場所であった。毒胞子ただよう魔法の森を抜け、地獄花が咲き誇る再思の道を通り、幻想郷のはしっこ無縁塚へと至る。無縁塚には紫色に咲き誇る妖怪桜がいるが、今は置いておく。妖怪桜に囲まれ、奇妙にポツンと小さな草原に出る。草原という言葉は間違いかもしれない、そこはまるで何も無い公園かのように。ただあるのは一つの白い鳥居。そこが蜃気楼の砂漠への唯一の道だった。

鳥居の向こう側もちろん、その広場の向こう側を映している。しかしくぐつてみたらどうだ。いつのまにか人は”無限”に存在する砂漠へと出ているのだ。そして後ろを振り向けばあらゆる不思議、くぐったはずの鳥居は存在せぬ。対魔の人間でも到底辿り着けない秘境。太陽が存在しないにも関わらず青空が永遠に広がり、太陽が存在しない故影も存在しない。歩き回る仙人掌や、大きな牙二本をまっすぐと向け砂漠を泳ぐようにかける大きな峯山のような龍。その砂漠は非常に恐ろしい場所であった。

三日月型の砂丘を越え、砂の山を飛び越え、砂を巻き起こす大嵐をくぐり抜け、山のような幻想種達と戦い、その向こう側にポツンと彼の住居は存在した。青色に反射する異常な透明度のオアシスに、人間が喰えば味覚を狂わす果物と惑わす草花。そして小さな小さな、不思議な形の岩の家、まるでそれは宮殿のように存在し、しかし人形の家のような雰囲気。それが幻想丸の家だった。いつのまにかやってきた幻想丸は、パシャパシャとオアシスの水を堪能したかと思うと岩の中に入っていた……

「（来たれ来たれ来訪者、星屑のように儂く）」

彼はその”持ち主”故に侵入者、もとい来訪者の存在を知ることが出来る。本当にマレに現れる来訪者は大抵すぐに死ぬ。妖怪に襲われるか、躍起になって砂漠を掘り返すという意味のないことをしたりと。その砂漠は不思議なことに暑くはない。むしろ過ごしやすい適温でもある。そんな奇妙な感覚を覚えるため非常に夕子の悪いことになるのだが。その砂漠は幻想郷において、特に里の人間達に間では二度と入ったら出ることは出来ないと言われていたが、それは間違いだ。

「（今回は98秒か、結構もったなあ）」

出るためには歩かなくてはいけない。砂漠を出たいと想う感情が存在するならば道は開かれる。砂漠のポツンと自身と妖怪しかいないはずの砂に足跡がポツポツ。それが道であり、屋気楼の砂漠を越えるための出口である。歩き歩き歩き走り走り絶望し、思考が一端はずれたとき迷子はいつのまにか人間の里に現れる。なんともまあ、不思議な場所である。もともと、幻想郷において不思議ではない場所は無いのだが。

「さて、今夜の得物は何でしょうか」

続く

妖気と怪奇（前書き）

撫でられるのがデフォルト

妖気と怪奇

不思議な不思議な屋気楼の砂漠には、それはそれは奇妙な木の実があるという。その味はあらゆる食物をゴミに変え、その匂いは全身を駆けめぐる。一口噛めば栄光を思い出し、二口噛めば希望を見出し、三口噛めば心を振るわせ、四口噛めば天に昇り、そして五口噛めば死に至る猛毒で。砂漠の甘露という極めて珍しいそれは一体一体どういふものなのか。

「（眠い…）」

石の屋根、石の壁、石の床、極めて細かい砂の布団に転がる白猫が一匹、欠伸をこぼした。彼こそその木の実が実るといふ木が生えるオアシス、そのオアシスがある屋気楼の砂漠の持ち主である『泰山法眼大幻想丸』であった。”彼”の主食は主にその木の実である。否、本来食事という行為は必要のないほど昇華した”妖怪”なのだ。腹が膨れるらしい。その木の実は猛烈な”毒”であり、その木の実が”彼”という極めて強烈な存在に影響されたからである。とある感情を向ける対象の”器”として生み出された彼は、もはや存在そのものが超常であり”妖怪”という枠組みに存在するほうが不思議なもので…、まあそれでも妖怪として生きているのだが。

「散歩にでも行くか」

猫は歩き出した。大きな石の塊くり抜いた彼の住居からポフポフと足音を出しながら出てきて、目の前にあるのはその砂漠唯一のオアシス。透明度の関係でもはや青色に発光している水をチロチロ舐め取り、器用にも二本足で立ったかと思えば、右手でその木の実をえぐり取る。赤と黒のが螺旋状に色づいているリンゴのような木の実

をかじる。ウミヤーと鳴く彼の姿はどうみても猫だった。

「（実に爽快だ）」

妖怪達の間ではその実は実に有名な存在になっている。というのも、妖怪が喰えば己の妖力が増すという伝説があるからだ。実際喰えば真偽がわかる、わかるのだが未だにそれは”伝説”として語り継がれている。彼ら幻想のモノたちにすら伝説と言われる存在とは、実に如何なモノであろうか。真偽がわかる、とはいったものの現時点において木の実を食って”生きている”妖怪は彼だけである、そういうわけなのだ。本来、その木に生えていた木の実は実に普通の木の実だった。しかし、その場に妖怪としての格が”最”が5つくらい並ぶような妖怪のお墨付き、まあその妖怪の妖力に”当て”られたのが原因で、結果としてその実は超常な妖力を蓄える妖怪植物となってしまうのだ。その木がわさわさと動くことは無いし、人を襲うわけでもない。されど、その木が蓄えている妖力というのは”純粹”で莫大で異常で、なによりも屋気楼の大妖怪の影響を受けたのだ、普通のはずがない。

シャリシャリ

地面から、空気から、彼が微量に放つ異常妖力を蓄え、そしてその実となり現代に降臨する。かつてはリングゴのように真っ赤な実が、黒い螺旋を描くようになり、彼でしか食べられぬ木の実となってしまう。というのも彼が持っている妖力とは少しばかり、他の妖怪のものと違い極めて忌々しい存在なのだ。彼は生まれた時代が極めて古く自然発生した妖怪なのだが、その発生方法に少し問題があった。しかし、これはまた後に語られることになるだろう。

「（ふむう、誰か食べぬものがないものか）」

妖怪という存在を知っているだろうか。妖、妖魔、闇の眷属恐怖の具現。人間が思い浮かべる妖怪はそのようなものばかり、現象そのものを姿とした災害。実はそれは当たり前なことである。なぜならば、彼ら妖怪は”そういう”ものとして誕生したからだ。自然信仰における神々達が、信仰という人々の信頼の力をエサとしその姿を現すように、妖怪もまた”存在している”と思われたからこそ存在するようになった。神と彼らは人間無しでは存在しない、神と彼らが違う点を上げるならば方向性だろう。神は人々を守るといふ人々の願望、自然そのものを表す。妖怪は人々を襲うという恐怖、克服すべき対象として儀式として、退治されるべき存在なのだ。

故に妖怪は人を襲う

人間達の恐怖から生まれた存在なのだ、恐怖たる存在でなくてははいけない。もつともてつとり早いのが”人間を襲う”という儀式だっただけだ。喰うにしろ孕ませるにしろ、ひどく醜悪で人間側から見ればなんということか。人間が思い浮かべる恐怖の具現は、そりや姿も怖い怖い。今でこそ”光”である生き物の人間の姿に憧れ摸倣し、現に生まれたころからヒトガタという妖怪もいる。総じて力が強かったり、種族として確立していたりと厄介な存在ばかりだが…、まあ結局目の前の猫のような”化け猫”というスタイルを確立させ、人化という術を用いるものもいる。結局妖怪にとって人とは食料であり、憧れであり、ただの下位存在で、存在しなければならぬ存在なのだ。矛盾、という言葉が似合う存在がこれ意外にどれほど存在しようか、人間無くては存在しえない、されど人間を消滅させようとする存在とは、さてさて。

「故に愉快で不愉快なり」

広大な砂漠を歩き出した猫がケラケラと笑う。猫の鳴き声ではなく人の笑い声のように。四本足による足跡が砂の大地に残る。迷い人がもしかしたらそれを辿ってしまうかもしれない。だが、なんだというのだろうか。彼は妖怪である。人間一匹の生死など特に深く考えることもなかった。死ねば何かの工サ、生きていても何かの工サ、運が良くても何かの工サ、運が悪ければ助かるかもしれない。そんな矛盾で平行の、そして不思議で摩訶不思議の砂漠の1日の始まりだった。

±化け猫±

泰山法眼大幻想丸という妖怪がいる。外見は白猫、真っ白な猫。どうみても猫。やっぱり猫。極めて猫。そんな猫のおける伝説の一説である。その猫というのは珍しいわけでもない『化け猫』という種族の妖怪というのが一般妖怪、お呼び人間の見解である。だが実際かつて”中身”を垣間見たスキマ妖怪ならばこう答える。

「あれが化け猫？神話の化け物の間違いよ」

プリチーな猫の外見とは裏腹に、妖怪の賢者ですらこう言わしめる彼は一体どういう妖怪なのか。世界を渡り、さまざまな伝奇や怪奇の話を読み解くと、一部分に同じ”存在”ではないかという化け物の話が出てくる。外の人間はそれに気づき、諸説では実際にその化け物が存在していたのではないかとそう思わせることもあった。白い体躯、古い絵には今でいう”猫”を表すのではないかという化け物、人を食らい神を討伐し、英雄と問答を交わし、時には英雄の

敵として、またある時には英雄を導いた。そんな、まあ不思議な存在である。もつとも、それが彼と同一存在かどうかは真偽の定かではない。

「失敬であるぞ八雲、我のようなプリチーな猫になんという」

妖怪の間では一部を除き実力主義の色が濃い。現に妖怪の賢者も2000ねjbfかbkH「うわあ！？痛い何をす」kKD1、；あjfsいガーーーーブチンツ！

「ノイズが聞こえてくるぞ八雲」

「変なゴミがいたみたいね」

「ゴミなのに”いた”とはな、とボソリと呟く。呟いたのは日光浴をしているのか、木材で出来ている綺麗な木目の廊下に寝転がっている白猫。ぐうたらにもお腹を無防備にさらけ出し、右隣に座っている金髪妖艶の美女、妖怪の賢者『八雲紫』に時々撫でられている。彼女の右手には綺麗な緑色のお茶がタプタプ揺れる湯飲み。左手は言うまでもなく幻想丸へと伸びている。幻想丸は嫌がる気配も、うれしがる気配もなく、ただポケーっ言葉を紡いだり、彼女の愚痴に適当に返答したりと。

「あーお茶が美味し」

「ふむ、まんまオババだな八雲」

「うっさいわねえ猫ジジイ」

軽口を叩く。妖怪の上位者、そこではよく大妖怪と言われるが、そ

んな妖怪達の9割9分が”性別上”女性であり、妖怪という特性上大部分が長く生きている存在である。幻想丸からしてみれば、妖怪の寿命を人間の尺度で測りジジババ決めるのは本当にみっともないと思っっているのだが、やはり女性は女性らしい。

「そう言うな、また妖力が増えておるぞ」

「遠回しに、歳とったね、っていいたいのかしら？」

「にゃ〜」

むんず、と聞こえてくるぐらい勢いよく猫を掴み、彼女の能力で開いた”スキマ”へとぶん投げける。これが彼女の能力『境界を操る程度の能力』だ。簡単に言うならば瞬間移動まがいのことをしたり、空間を操ったり、結界の外に自由に出入りしたりと実に神出鬼没を体現するような能力である。そんなスキマへと放り投げられた幻想丸だったが、ニヤァ、と彼女の背後にそんな声。

「おうおう、怖い怖い」

「……」

もちろん相手は幻想丸だった。彼女は「外の世界に放り込んだはずなのに」とブツブツと呟く。神出鬼没という点で考えるならばそれは幻想丸自身も負けてはいない、むしろ大勝利である。彼は『存在して存在しない程度の能力』を保有している星の精霊クラスの格をもった妖怪だ。どこに存在しようとも、そこには存在していない。故にどこにも存在できるし干渉も不可能。というあやふやで理解不能な能力である。彼にとって、神ですら封印するような大結界も、現実と幻想をわける大結界も、境界の妖怪が作りだした己の空間

も、どこぞの錬鉄の英雄が作り出した無限の剣の世界も、彼にとつては己の箱庭のごとく、自由に出入りできるといふ。

「まあ無駄、だ。本来ならば我にも触れられぬというのに」

それは本当だ。彼の能力上、干渉は不可能、その気になれば大地を越え重力にそつて、否、重力からすら解放されるトンデモ設定の彼だ。彼の能力の強弱を軽く説明するというのなら

全力で抑える＝命を削るような攻撃以外は当たる

頑張つて抑える＝やさしく（エロくない）しないと触れれない

少し抑える＝無意識じゃないと触れれない

抑えない＝無理

解放＝なにこれこわい

とっておこう。彼は常に能力や妖力を全力で抑えるという妙な癖を持つている。というのも”接触”というのは精神の発達上実に必要であるからだ。彼は想像も出来ないような悠久の年月を重ねている大妖怪の中の大妖怪。妖怪という本質を理解し、肯定も否定もしない存在だ。簡潔に言つと「忘れる」のだ、あらゆる生き物が持つ五感が退化しないように、という配慮だ。その気になれば”痛み”や”匂い”なども、己の脳が感じ取る前にそれを存在しないようにする事も出来るが、なるべくはやらないという彼の心構えだ。実際は結構多用する、特に痛覚は。

「まったく、とんだ化け物ねアタナは」

「ニヤー」

八雲が派手な扇子で口元を隠す。フッフ、と上品に笑うその仕草は

実に美しく、まさしく幻想的だった。夕暮れの紅色に燃える太陽の光を浴びる美女と野獣（猫）は、そのまま夕日が落ちていく様子をただじっと、見守っていた。とくに会話するわけでもなく、意思疎通をするわけでもない。ただそこに二人は”存在”していただけ、しかし二人には満足という感情が”存在”していた。

「あの……お夕飯が」

そんな中空気を読めないのか、腰あたりが尻尾でもふもふしている妖怪　まあ八雲紫の式神のだが　が”存在”した。猫のほうはノリ気で、尻尾をピンと天に向けて張っていたのだが、八雲のほうは目が「邪魔するんじゃねー」と語っていた。普段は怠けているせに、と式神『八雲藍』ヤクモランは思う。口に出なかつたのが幸いだ。

「九尾よ九尾、我のは？」

「あ、はい。こちらです幻想丸様」

彼女の正体は九尾の狐である。日本三大化生の一角である玉藻前と、少なくとも同格の妖怪である。妖怪というのは尻尾が妖怪としての格を表すことが多い。九尾はそれらの中で”最も格が強い”という意味なのだが、彼女は目の前の歩く大幻想を見て、それだけはありません、と言う。彼の尻尾は見た限り一本だが、実際の本数は本人ですらわからないという。妖獣の頂点である九尾の狐が、へこへこする程度の妖獣。実に困った存在である。

「んまいんまい」

小さな器に盛られた食事を猫らしくガツツク彼を楽しそうに見て（観察）いる八雲紫、そんな主のご機嫌の良さを感じて自然と笑みが

こぼれる八雲藍。ほのぼのとしたう情景、実に素晴らしいものである。その気になれば三匹とも傾国を行うことの出来る大妖怪なのだが、だが、そんな光景に終わりが見えた。突然彼はピタっと時間が止まったかのように静止した。

「飽きた帰る」

二人が声をかける暇も無く消え去った。静止して数秒後、二人は再起動。紫の声が天まで届いたという。もちろん嘘だが。飽きた、というのも彼は妖怪である。妖怪の食料のイメージは人間などに当てはまるだろう。しかし実際はそうじゃない。彼のような古来からの妖怪は恐怖を糧をする。人間や今の妖怪達が食べる食事というのは、彼にとって嗜好品程度しかないのだ。自由気ままに行きすぎる彼の思考は、たかだが2000年ぼつちに妖怪にはわかることは出来ない。無論、そこら辺の妖怪にとって2000年生きた妖怪の思考もわからないものだが。

「だからといって帰る奴がどこにいるのかしら、ねえ！」

空へと叫ぶ八雲紫。プンスカプンスカと頭から煙を放出している。藍は、イメージ程度だが夜になろうとしている空の向こう側に猫がサムズアップしている幻影を見たという。実際出来そうだから困る。

続く

終点と始点（前書き）

ばけねこの はじまりの おはなし

終点と始点

「……え、何？」

仔猫がそこで目を覚ました。日本語らしき言語をしゃべっているという時点で既に普通では無いことがわかる。しかし、その場にいた真っ白な猫は何のことかまったく理解も出来ていなかった。恐らく自分の体がどういう状況さえもわかってはいないだろう。なぜならば……彼は人間だったからだ。いや、この言葉は間違いだ。正しく言うならば「人間であった」はず」なのだ。そう、人間としての記憶を保有し、人間としての感情を抱いていたはずなのだ。

「すごく……大きいです」

仔猫から見れば、彼の眼前にある紅葉まみれの木は、どんな木であろうと巨木になりうる。そして紅葉で地面が埋まっている状況というのは、仔猫にとってそれは大変辛いことだろう。彼から見れば、普通に己の部屋で寝ていたはずなのに……

「（部屋？誰の？どんな部屋だったか……というか部屋なんて持ってたっけ？）」

思い出すことは出来た。だが、肝心の中身がまったく思い出すことが出来なかったのだ。人間として生活した記憶はあっても、どのような生活かまったく思い出せない。それどころか……、初等学校で死んだ記憶、中学校で死んだ記憶、高等学校で死んだ記憶、大学で死んだ記憶、大学院に進んだ記憶、会社に勤めた記憶、会社に内定を貰えなかった記憶、結婚した記憶、子供どころか妻もおらず孤独死した記憶、全部あった。全部思い出せた。わけのわからない、こ

れが未だに自分が猫だと気付いていない彼の”最初”の感情だった。

「（我は……我？……我は”何”だ？）」

記憶と言えるかどうかもわからない、もはや知識のソレはぐるぐる螺旋を描く。全部思い出し、全部記憶しており、全部見覚えが無いはずなのに、まるでそれが当たり前かのように。ごく自然で、極限に普通で、何よりも異常で。登場人物の誰一人とも一切覚えていないのに、誰がどこで何をしていたかを記憶している。己の名前すら無い、人々は黒い黒いヒトガタの何か。ぼやけてぼやけて、まんまのお目々とまんまるお口、それだけが白く鈍く忌々しく輝いている。

恐怖

「（名前……名前……どれだ？）」

無限に続くかというほど、大量に流れてくる”名前”の円盤。肉塊の識別用語であり、全てを表す神聖な言語。全部が全部思い出せるのに、全部が全部わけのわからない。脳内を巡る懐かしきかの光景、憧れたあの景色、遠く渴望したその情景、遙か遠き無限の彼方。思い出せる、思い出すことが出来る、思い出しすぎる。どれが自分で、どれが自分じゃないのか、まったく理解の出来ない仔猫、白き白き神々しく禍々しく、それでいて不思議な普通の化け猫の。

「（わけがわからない……なのに）」

ナゼ コレガ 普通ダト オモッテ シマウノカ

思い出せることが普通なのだ。思い出すことが出来て普通なのだ。思い出しすぎて普通なのだ。どれが自分で自分じゃないのか、わかなくて普通なのだ。記憶が複数あつて当然で普通なのだ。”わけがわからなくて”普通なのだ。なぜならば彼は”そう”なのだからそれが彼であり、彼の原初で始まり真祖の物語。終点から始まり始点で終わる無限の平行、平行の三角形。矛盾でありながら矛盾として生きる。矛盾でありながら矛盾であるのが通常で、その”存在”は全て”矛盾”で、生き物でありながら全てを内包する大幻想。

「ああ、なるほど……それが我が」

仔猫は我が身をみやった。白い体躯、体を支える四本足。神々しい白尻尾。もう、彼の思考の中には、どれが自分で、どれが自分じゃないのかどうでもよかった。彼は理解したのだ、わかってしまったのだ。どれもが自分でどれもが自分ではない、と。それが彼という”存在”でありそのような”存在”は存在することはない。故に彼は矛盾の存在。己が身の変化、そういう存在でありながら、そういう存在を否定する存在。矛盾である、だからこそ彼だった。

「おかしいなあ……妖怪だなんて」

それは妖怪という生き物として生まれた。人間のとある矛盾した感情の受け皿として。故に彼は矛盾という神秘を潜めた幻想であるのだ。存在して存在しないという矛盾を。何故それが妖怪という器に生まれたのか？簡単だった。妖怪が単純に恐怖たる存在だからだ。恐怖を受け取る受け皿として、これ異常に正しい器は無い。

「（存在して存在しない程度の能力……東方かつ）」

妖怪とは恐怖の存在である。人々がそう思い、いると思われたから

妖怪は生まれた。暗い暗い森の奥深く。叫べば声が返ってくる山の頂き、沈めば返ってこれない深い海の底、物が置かれその間にできる不思議な隙間、背後に感じる”存在しない”謎の気配。人々が感じたからこそ、本当は存在してはいないものに恐怖を感じたからこそ、矛盾なのだ。誰が存在しないものに恐怖を覚えるだろうか。本当ならばその恐怖は存在するはずがなかった。しかし、今こうやって人々はその感情を持った。だからこそ矛盾。だからこそ彼が生まれた。世界というのは、ひどく矛盾を嫌う存在である。故に存在しない恐怖を存在する恐怖に変えた。存在しない恐怖を受け取る受け皿として、存在しない恐怖たる存在として、そういう受け皿が”存在”するようにしたのだ。結果として彼は存在して存在しない存在になった。故に彼は存在して存在しない。それが彼の本質であり全て。

「（なんで猫なのだろうか……）」

名無しの白い猫が山を歩いていった。紅葉で埋め尽くされた広場のような場所も、既に通り過ぎ山らしい土色と、木々の根っこが我先にと繁栄している大地。そのような場所を四本足の猫が歩いていった。自分の存在を理解したとしても、やはり慣れない体に慣れない土地。時々足をひっかけたりしそうになるが、そこは妖怪という力だろうか。上手く体勢を整え、こけることなど1回も無かった。体勢を上手く整えるたびに「おお」と一人歡喜に溢れる妖怪。何が嬉しいのだろうか。

「（これが、妖力……って奴か。ふーん）」

声に出すことは無かった。木々の間をすり抜けるように”木の中を通り過ぎる”彼はまさしく正体不明の存在だった。存在して存在しない彼なのだ。存在していなからこそ、外界は彼に干渉出来るはずがない。しかし、彼という存在は存在しているため彼は外界に干渉を与えることが出来るのだ。能力の発動は妖力の強弱で。地面を貫通しそうになったこともあれば、逆に空気すらも干渉出来なくなっただこともあった。いつしか、彼は能力の制御を行えるようになり、そしてこうやって特定の物体だけ干渉出来なくしたり、どこにも存在するからこそ、存在している場所（知っている場所）ならば一瞬以下の速さで移動することも出来る。

「ニャーニャー」

だが、彼はそんなことはあんまりしなかった。猫という体のせいか歩くという行為が妙に心地よくなったのだ。未だに猫という体型からは逃れることは出来ないが、猫も案外悪くないと感じ始めたのだ。まず最初に彼が行ったのは鳴き声の練習だった。特に意味はないが、猫が猫たらしめるのは鳴き声という特定の人にしか理解出来ないような理論を展開し、そして見事に会得しきった。彼はご機嫌な様子でポムポムと森を踏むしめる。尻尾が上向きにピンと張っている様子から、かなりのご機嫌ぶりだとわかる。ゴロゴロと喉を鳴らし、木々の間から漏れる日光を全身に。彼の体毛は太陽の光を反射し輝いていた。神秘的な光景なのだが、残念なことに見る人はいなかった。

「（……妖力か）」

ピク、と一端猫の動きが止まった。キョロキョロと周りを見渡す。不自然なほど静まり返った森。遠くから次々と無言に鳥たりが飛び

去る音が聞こえた。

「（初の妖怪というわけか、ついでだから時代でもそれとなく聞いてみるか）」

静まりかえった森、しかしその後不自然な震動が伝わってきた。木々が倒れる音だった。彼はゆっくりとゆっくりと、その音が聞こえてくる場所に行くことにした。産み落とされ森から出たことの無い彼は、その森にいた普通の動物が全てであったが、その動物たちから時代を予想することも出来るほど回転が良いわけでもなかった。知識を巡ればわかるかもしれないが、面倒くせえ、と一蹴し今現在に至る。

「誰じゃ」

「や、我白猫」

相手側もこちらの存在に気付いたようだった。彼はその妖怪らしき大男を見やる。真っ赤な体躯だ。人間型、と思えば角が天にむけてピンっと。人間らしからぬ顔だ。牙をばやしまさしく”鬼”だった。人間型というより、人間の体と同じ型と言ったほうがいいかもしれない。人間に化けるならば、肌の色を変えるだろう。もっとも彼が今現在人間がいるかどうかは知る由がなかったわけだが。というか自己紹介しながら「今猫っているんかいな」と今更ながらに思っている彼だった。

「同胞か、初めてみるのう」

「我もだ」

鬼が先程作ったのか、木で適当に組み上げた椅子っぽい何かに腰をかける。彼も同じように、鬼の側で丸くなるのだった。後は、妖怪らしい会話ではなく、むしろ人間っぽい普通の会話だった。

「どこから来たんじゃ？ 儂は……向こう側からじゃ」

向こう側と言いながら、指を差す鬼。彼はああ、とそこで思い出した。未だに距離を表す言葉がハッキリしてないのだろう。東西南北確定するまでまだまだ、というわけだ。人間がない、というのは彼の存在理由からしてありえない。まず人間がいる時代、一番古くても現代より一万と二千年前だろう。

「ああ、あっちか。あっちには大きな滝があつたな。我は生まれてからずっとここだ」

ペシペシと尻尾で椅子になっっている巨木を叩いた。大きな滝を見てきたのか、滝について色々な感想を言う鬼に彼はおしゃべりだなあとか思うが、初めて会った妖怪ということもあるのだろう。鬼は手振りですごさを表そうとしているのか手を大きく振り回す。さすが鬼というべきか、鬼が手を振るい度に風が爆発する音がするが、彼も特に気にすることはなかった。

「なあなあ、人間という奴をみたことあるか？」

「人間、おお！人間か。見たことあるぞ。ほれ向こうじゃ、太陽が昇る方向。しよっぱい大きな湖があるんじゃ」

海のことだろう、太陽という言葉を知っているのに海という言葉を知らないとは、とそんな些細な疑問を覚えた。彼は鬼に礼を言つと、その大きな湖がある場所へと向かった。別れの言葉を言つと、さす

が妖怪というべきか薄情にも「くたばるなよ」と一言。案内する気もないのだろう。鬼が酒を飲むのはいつごろだろうか、とそんな事を思いながら彼は歩きだした。歩幅がかなり小さいが、妖怪という関係上時間というのはあんまり関係ない。故に、のんびりと行くことにした。

「（海辺で生活か、縄文辺りか？）」

疑問に思うが、答える存在はいない。彼でも鬼との別れを少し惜しんだか、同時に「また会えるだろう」と、妖怪らしい発想で埋めつくされた。種族として確定しているわけではない彼らはまだ、仲間という意識が特に薄いようだ。下手をすれば同じ妖怪でも捕食者とエサの関係になるかもしれないのだった。

そして猫は、己を知り妖怪を知り全てを知る。何より彼こそ妖怪である故に。

昔から続く

終点と始点（後書き）

受け皿、という言葉が別の東方SSで見てニヤケてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5639m/>

東方屋『奇』楼

2010年10月8日22時43分発行